
きみが振り返るとき

百瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみが振り返るとき

【Nコード】

N1030C

【作者名】

百瀬

【あらすじ】

別れのときを迎えた、きみと僕の物語です。

——もう終わりにしよう？

三年間続いた僕たちの関係は、きみのこの一言で唐突に終わりを告げることになった。

いや、本当はもっと前から終わっていたのかもしれない。愛情と呼べるものを僕たちの間に見つけたそうとするのは、少々難しい。

この三年の間に僕たちは大学を卒業し、社会人になった。僕たちを取り囲む環境は劇的に変化したのだ。

また、初めて訪れる様々な出来事に戸惑っているうちに、自分のことに精一杯になってしまつて、相手を思いやる気持ちに欠けてしまつていたことも事実だろう。

「じゃあね」

きみは、まるでいつものように仕事に向かつて、いつものようにこの部屋に帰ってくるんじゃないかと思わせるほど、自然に僕に声を掛けた。

しかし、きみはスーツではなく春先に似合いの淡い色のワンピースを着て、手にはキャリーバッグを持っていた。

きみがこのあとどこに向かうのかは知らない。実家に戻るのか、友人の家に泊めてもらうのか。

それとも、他の男の元へと向かうのだろうか……。

この期に及んで、まだそんなことを考えている自分の女々しさ加減に、思わずため息が漏れた。

玄関を一步出たところで、きみは立ち止まった。

続いて靴を履いて見送りに出ようと思つていた僕は、右足を半分

だけスニーカーに突っ込んだ姿勢で止まった。

「裕二」

きみは振り返らないまま、僕の名前を読んだ。僕は次の言葉を待った。アパートを出てすぐのところにある車道を、一台のトラックが走り去っていったのが分かった。

奇妙な間に耐えられそうになくなって僕は

「何？」と聞いた。

そこで、ようやくきみが口を開いた。しかし、まだ前を向いたまままだ。

「やっぱり、見送りはここまでで大丈夫だよ」

僕にはきみの背中しか見えない。だから、今、きみがどんな表情をしているのか分からなかった。いや、もし表情が見えていたとしても、愚かな僕はやはり同じ台詞を口にしていただろう。

「下で、男が待っているのか？」

それは、きみが僕に別れ話を切り出したときに抱えていた疑問だった。

しかし、別れる決意を固めたきみに追いつくような、そんな情けないことをする気など毛頭なかったし、きみが何も言うつもりがないのなら、僕も何も聞くつもりはなかった。はずだった。それなのに、よりにもよってこんなタイミングで口に出してしまうなんて……。

僕は激しい後悔とともに、一カ月前のことを思い出していた。

一カ月前、僕たちはこの部屋で、ぼつぼつと少ない会話をしながら夕食をとっていた。

僕が、職場の他愛もない噂話について語り、きみが、それに合わせて相づちを打っていた。いつものことだ。

そのうち会話もなくなり、目の前の料理を黙々と消化していたとき、きみが例の台詞を口にした。

「もう終わりにしよう?」

他に好きな人が出来たわけでも、あなたを嫌いになったわけでもない。でも、二人で居ても、なぜか虚しいの。一緒に居る意味が、分からなくなったの……。

そう言ったきみの言葉を、僕は分かった、の一言で受け入れた。前から考えていたことなのか、ここ最近の話なのか、聞きたいことは山ほどあったが、素直に受け入れた。きみが言うのなら、僕もその方が良いと思ったからだ。

未練を感じるほどの情熱的な想いは、この三年間でどこかへ置いてきてしまっていたようだ。

しかし、それからの一カ月、ただただ冷静に荷物を片付けているきみを見て、僕はだんだんと疑惑の念を抱き始めた。

きみは、本当にすべてを語ったのだろうか。もしかしたら、僕が知らない間にきみは、すでに僕以外の誰かのものになってしまっていたのではないだろうか……。

疑い始めたら切りがなくなる。僕の中に芽生えた黒々とした陰鬱な思いは、いつまでも消えることなく蓄積していった。

それでも、きみがこの部屋を出て行って、僕たちが付き合う前の状態に戻って、それなりにひとりの生活に慣れてきたら、そんな思いも自然に消えていく。そう信じていた。

しかし、僕が気付いていなかっただけで、こんな肝心なときに口に出してしまうほど、その陰鬱な思いは僕の心を支配していたのだ

ろう。

僕が口走ってしまった女々しい愚問は、当然きみの耳にも届いていたはずだ。僕はどうすることも出来ずに、きみの言葉を待った。どれくらい待ったのだろうか。僕にはきみが石になってしまったんじゃないのかと思うほど、長い時間に感じられた。しかし、本当のところは一分も経っていなかったのだろう。そう思うほど、僕たちの間には重い空気が流れていた。少なくとも僕はそう思った。しばらくしてきみは、僕の方へ振り返った。

「裕二」

僕の名前を呼んだきみは、僕が今まで見てきたどんな場面のきみよりも、優しい微笑みをしていた。

僕はきみのことを、本当は何も知らなかったのではないだろうか。急にそう思えてきて、手の届く距離に居るはずのきみが、僕にはとても遠い存在になったように感じられた。

身長差二十センチの僕たちは、いつもきみが僕を見上げることで視線を交わしていた。今も、きみは僕を見上げていた。微笑みは崩していなかった。

「裕二。私ね、あなたのそういうところが、ずっと嫌いだった」

きみが僕に対して“嫌い”という言葉を使うなんてことは、今までなかった。いや、僕以外に対しても、きみは否定的な言葉を使うことを、極端に避けていた節があった。

しかし、なぜだろう。今、きみの口にする“嫌い”には、不快感を抱かせない、どこか切ない響きが含まれていた。

きみは言葉を続けた。

「あのとき、別れようって言った私を、あなたは問いただそうとも

せずに二つ返事で受け入れたよね。そして、黙って荷物を整理している私を、あなたはやっぱり黙って見ていた」

そして、やはり今も、僕は黙って見守っていた。

きみは一度目を伏せて、再び僕の瞳を覗いた。きみは、一体そこから何を探したそうとしていたのか。

「あなた、本当は私のこと疑っていたんでしょう？ 他に男がいるんじゃないかって、そう思っていたんでしょう？」

返す言葉はなかった。きみの言葉は真実だ。

「それでも私に何も聞かなかった。今に限ったことじゃないわ。今までずっと、何か衝突しそうなことがあるたびに、あなたは黙って我慢していた」

あくまで淡々と、きみは言葉を続けた。

「私はあなたのそういうところが、嫌いだったの」

僕は黙ってきみの言葉を聞いていた。

きみは視線を逸らした。

「あなたは最初から、私をもっと深く知ろうとすることを諦めていた。私にも、何も見せようとしなかった」

きみの瞳は、半分だけスニーカーに突っ込んだ、不恰好な僕の右足を見ていた。

「だけど私も、今頃になってしか本音を言えない」

きみの声は、心なしに震えているように感じた。

「結局私たちは、どこか似たもの同士だったんだと思う。だから惹かれ合ったんだと、そう思う。だけど、二人ともそんな感じだったから、結局、いつまで経っても分かり合えなかった……」

きみが顔を上げた。さっきと同じ微笑みがあった。

「しばらくは美和にお世話になるつもり。同じ大学だったから、名前くらいは覚えているでしょう？」

そう言って、きみはキャリーバッグの持ち手を握り直した。

「今頃こんなこと言って、ごめんなさい」

見上げることを止めたきみと、視線を交わすことは出来なかった。

「バイバイ」

きみのワンピースの裾がはためいた。そしてそのまま玄関のドアが閉じられた。

僕の、何かを口にしようと思って開いた唇も、引き止めようとだらしなく伸ばした右腕も、すべてが置き去られてしまった。

結局、別れの原因は、環境の変化でも何でもなく、僕たちの気持ちに噛み合っていなかったと、そういうことなのか？

それを僕は勝手に周りのせいにして、一人で納得していたということなのか？

きみが閉じたドアの音が僕の耳にいつまでも響いているような気がした。

……これで良いんだ。

心の奥底で声がする。

僕たちの関係はすでに冷えきったものだった。今更、相手の本音を聞いたところで、どうこう出来る問題でもあるまい。

けれどね……。

もうひとつ、別の声が聞こえてくる。

けれど、僕はそれで本当に良いのだろうか。僕はきみに何も伝え
ないまま、ここで終わりにしても、本当に良いのだろうか。

自己主張は苦手だ。流れに逆らう気など、さらさらない。

しかし、想いをぶつけることで見えてくる真実も、あるんじゃないのか……？

玄関のドアを見つめる。それは静かにそこにある。

——僕は今、どうしたい？

半分だけスニーカーに突っ込んだままの右足を、僕は今度こそ全部ねじ込んだ。左足も同じようにして、飛び出るように目の前のドアを開けた。

僕たちの部屋は、二階建てのアパートの二階に位置する。部屋を出てすぐの廊下の手摺りから身を乗り出して、僕はきみの姿を必死で探した。

すると、アパートの駐車場を横切るように歩くきみの姿を発見した。

迎えが来ている様子はなかった。しかし、そんなことはもうどうでもいい。

「綾子！」

きみの名前を叫んで、僕は走りだした。きみが僕の声に気付いたかどうかは分からなかった。それでも僕は走りだした。

階段を駆け下りながら、僕は考えていた。

どうして僕たちは、別れなければならなかったのだろう。どうして僕たちは、その道を選んでしまったのだろう。

やり直すきっかけなら、きっといくらでもあったはずだ。

それをしなかったのは、結局は自分を守るためだ。情けなくともない自分に、なりたくなかったからだ。

……しかし、本当に守らなければならなかったのは、そんなことか？

……そんなことのために、僕はきみとの関係を終わらせるのか？

アパートの階段を余裕のない顔で全力疾走する僕は、傍から見ればやはり滑稽だろう。

しかし、それでも良いんだ。今やっとそう思う。

きみに想いを伝えるためなら、情けなくともみつともなくても構わない。

そして今まで溜め込んできたたくさんの想いを、どんなに時間がかかっても良い。伝えたい。

きみに伝えたいことは、たくさん残っていたはずなのだから……。息を切らしながら駐車場に辿り着く。

目の前には、まだ二階を見上げたままのきみの姿があった。

先ほど距離を感じたきみの姿が、今は何だかとても愛しい。

僕たちは、お互いにもう少し素直になるべきだったんだ。本音をぶつけ合って、傷付け合って、お互いを認め合うべきだったんだ。

しかし、今それが分かったからといって、僕たちの何かが変わるのかどうかは僕にも分からない。

今更、もう遅いのかもしれなかった。

ただ、何もしないで諦めるのならば、そんなことをするくらいならば、試してみる価値はあると思った。

分かり合う努力を、試してみる価値はあると思った。

「綾子！」

僕はもう一度、叫んだ。

きみが振り返るとき、僕の表情にはきみを優しく受け入れるための、誰よりも温かい微笑みが浮かんでいたらしいのに。
僕は心から、そう願っていた。

— f i n —

（後書き）

作者の百瀬です

この作品は、私にとって思い入れの強い作品のひとつです。少しでも多くの皆さんの目に留まり、少しでも気に入っていただくことが出来たなら幸いです。

最後になりましたが、ここまでお付き合いくださった皆さんに本当に感謝です！

携帯小説Rankingに参加しています。トップページ下のリンクから投票していただけたら嬉しいです……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1030c/>

きみが振り返るとき

2010年12月8日18時48分発行